

第3領域「生徒指導の課題と実践」

神村 栄一

五泉市（8月2日）、村上市（同4日）、新潟市（同18日）に、集中講義として行われた（上記の他、五十嵐キャンパスで、6月25日と10月22日に補講を実施）。

教職大学院の授業として相応しい、より実践的な内容とするため、県内の3つの市の教育委員会と教育相談センターのご協力を得、事実上の「教育委員会共催」として計画された。

現職院生から3名が、実習先（昨年度までの勤務校）の学校、学区の教職員と共に、チーム・連携関係で対応してきた「現在進行中」の事例の提供を担当した。さらに、ありがたいことに、会場となった市内の小・中学校からも、現在支援を継続している生徒指導・教育相談上の課題をかかえる事例とその支援経過を報告いただいた。これらを貴重な学びの材料とした研修を行うことができた。

授業参加にあたっては、大学院生、地域の教職員としての参加にかかわらず全員が「守秘義務遵守の誓約書」に署名することを求めた。配布資料等はすべて、終了後発表者のもとに回収された。個人情報扱いながら学ぶことの重さを、再認識する機会ともなった。

授業では、校内での事例会議の進め方を学ぶための配慮もなされた。理想や理論でなく、身近にある実際の事例の、わずかでも着実な改善、実効ある支援の技術や発想の能力を高めるための演習が繰り返された。毎回、事例検討がメインであったが、担当教員により、「教育相談を活かす学級経営」、「校内での事例検討の進め方」、「不登校支援の未然防止と初期対応」、「思春期の心の病の基礎理解」、「地域や学校間の連携」、「社交的スキルの形成」など、テーマを絞ったミニ講義も行った。大学院生からは、毎回、授業感想の提出を求めたが、概ね好評であった。学部卒直後の院生にとっては、事例検討そのものがほとんど初めてであり、現職院生にとっても、「現場では丁寧な事例検討の経験が少ない」、「（職場だと）似たような視点に凝り固まりがち」、「異なる校種の事例に触れることはほとんどない」ということで、今回の授業が新鮮な学びの機会であったこともうかがえた。

現場で子どもたちに変化を生むためには具体的に何が必要か。履修院生の授業感想から、それぞれに学ぶものがあつたことがうかがえた。あらためて、ご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。